

『桜の実の熟する時』の読まれ方
—大正前期の文芸投稿雑誌の言説を視座にして—

SHIMAZAKI TŌSON'S *WHEN THE CHERRIES RIPEN*, ITS READERS,
AND THE CONTRIBUTION MAGAZINES OF THE TAISHŌ ERA

Irina Holca¹

Senior Lecturer, Kyoto University

irina.holca@gmail.com

Abstract: This paper analyzes Shimazaki Tōson's autobiographical novel *When the Cherries Ripen* in connection with its publication medium, 'Bunshō Kurabu', one of the most widely read contribution magazines of the Taishō period. Such magazines had become popular around the turn of the century; by encouraging readers to send in their contributions to be judged by famous writers (and published as a prize, if they were deemed worthy), they were, on the surface, signaling towards the possibility of any reader to become a writer, while in reality shaping a new type of readership, ready to identify the modern writer with a role-model, idol-like existence. Thus, the elevated status of the Taishō writer often turned him into a "man of character" and moralist, who used the space provided by magazines to educate his future readers, and shape their perceptions about his own works/ public persona. My paper discusses Tōson's novel as a representative of this tendency, interpreting it not only as a mere reflection of the author's life, but also as part of the broader historical and cultural context, which had made autobiographical novels and the surrounding media discourse an important locus for the virtual encounter of writers and readers.

Keywords: readership, media, Shimazaki Tōson, contribution magazines, *When the Cherries Ripen*

¹ Irina Holca graduated from the Oriental Studies Department of the University of Bucharest, and went on to study modern Japanese literature and education for her master's degree at Nara University of Education. After obtaining her PhD in modern Japanese literature from Osaka University's Graduate School of Letters, she taught English, comparative culture, world literature and Japanese literature and history at the same university. She is now a senior lecturer at Kyoto University's Institute for Research in Humanities, where she focuses on Japanese autobiographical writing and its critical reception in Japan and the West, as well as issues related to *kokugo* (national language) education, and translation, media and postcolonial studies.

1.はじめに

大正二年一月に、当時「文章世界」の編集に携わっていた前田晁の「年若な読者のために」²という依頼に応じて、島崎藤村が「桜の実」を連載し始める。作者は一章と二章のみを載せ、後ほど「新生事件」と呼ばれるようになった姪との不倫事件に決着をつけるため、四月にフランスへ渡る。その後、一年近くの執筆空白を挟み、大正三年五月から題目を『桜の実の熟する時』と改め、フランスから原稿を送りながら、小説の連載を再開する。帰国後も、大正六年一月から翌年六月まで「文章世界」で『桜の実の熟する時』の連載が続き、大正七年五月から「新生事件」を告白した小説『新生』（「朝日新聞」）の発表と平行している。

『桜の実の熟する時』は、明治四一年四月七日から同年八月二〇日まで「東京朝日新聞」に連載された、作者自身を含む元「文学界」同人達をモデルとした小説『春』の内容と深い関係を持っている。また、藤村自身が『桜の実の熟する時』は『春』の序曲とも見られるであろう³と述べている。しかし、執筆の時期は「新生事件」や小説『新生』の執筆と重なっているため、先行研究においては本作品を藤村と姪との不倫事件や、それに伴った作者の渡仏と結びつけて、それらの出来事を描いた『新生』の「序曲」、「母胎」、「原型」として論じられることが多い⁴。

また、先行論では、『桜の実の熟する時』中に描かれている主人公の〈成長〉、〈人間形成〉、〈自我確立〉の過程は典型的な青春小説の要素であるとされ、「ドイツ型教養小説」⁵、あるいはイギリス型の「芸術家小説」、「イニシエーション小説」⁶であると指摘されている。このような先行論の多くにおいては、教養小説的な要素も作者自身の個人的な危機感と関連づけられ、藤村が『桜の実の熟する時』における性格の純粋な幸吉像⁷を通して、墮落した『新生』の岸本像の挽回を示していたとの指摘もある。

² 島崎藤村「『桜の実の熟する時』の後に」（「定本版藤村文庫」第四巻、昭和一二）。

³ 「『桜の実の熟する時』の後に」（「定本版藤村文庫」第四巻、昭和一二）。

⁴ 例えば、瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』（実業之日本社、昭和四二）、和田謹吾「島崎藤村」（「国文学解釈と鑑賞」、昭和四六・八）伊東一夫「『桜の実の熟する時』論考」（東洋大学大学院、昭和五一・三）などの論がある。

⁵ 笹淵友一「『桜の実の熟する時』論（上・下）」（「学苑」昭和六一・一一、昭和六二・二）。

⁶ 滝藤満義「『桜の実の熟する時』—失われた時間を求めて—」（『島崎藤村』明治書院、平成三）。

⁷ 単行本化の際、登場人物の名前がすべて『春』、また『新生』のそれに通じるもの（岡幸吉→岸本捨吉、西尾→菅、明石→足立）に改められた。

他方で、執筆当時の時代背景を視野に入れて考察を行ったものとして、高橋昌子の論文がある。「事業」と「実業」の間—『春』から『桜の実の熟する時』へ—⁸では、大正期の若い読者の興味が「公的領域」から「私的領域」へと向けられるようになったことに反応した結果、藤村は「文学」を「事業」として捉えず、その代わりに文学の宗教性や神秘性を強調することを選んだと指摘されている。また、高橋昌子『『桜の実の熟する時』の読書—「生涯」の模倣から「文章」の模倣へ—⁹においては、引用や言及される透谷などの様々な文章の「読者」としてテキストに登場する幸吉の読む行為には、『桜の実の熟する時』自体が「どのように読まれてほしい」という作者からのメッセージが込められており、当時行われつつあった「私小説享受」への変化というプロセスが確認できると述べられている。

『桜の実の熟する時』は藤村の実生活上の問題（「新生事件」、渡仏）にもかかわらず、六年にわたって執筆された小説である。作者自身が単行本化の際に扉に載せた「これは自分の著作の中で年若き読者に勧めてみたいと思ふものの一つだ」¹⁰という言葉、また「文章世界」という雑誌の特質からも分かるように、その想定されていた読者は「年若き」者である。『春』において描かれた出来事は明治二六・七から同二九・九までのものであったが、今回は作者のより古い過去が掘り起こされ、明治二三年から明治二六年までの出来事が描かれている。本論ではこのような内容を持つ『桜の実の熟する時』というテキストの特徴を検討し、それらの特徴を大正期の文芸投稿雑誌「文章世界」や「文章倶楽部」の誌面に頻繁に現れている言説と結びつけて考察し、その当時における一つの読まれ方を明らかにしていきたい。

2. 『桜の実の熟する時』の特徴

2.1 回顧の眼差し

『春』と『桜の実の熟する時』は「元禄の大家が明治の代に復活した頃」（『春』）、あるいは明治の「まだ若い二十年代」や「まだ水道といふものは無い頃」（『桜の実の熟する時』）の出来事を回想する、といった関連した内容と、その時代を生きた青年という共通

⁸ 「島崎藤村研究 第二五号」平成九・九。

⁹ 「国文学解釈と鑑賞—島崎藤村 生誕百三十年特集」平成一四・一〇。

¹⁰ 春陽堂から、大正八・一・一。

の登場人物を持つと先に述べた。しかし、一つの異なる要素としては、この〈回想〉の中心に置かれている人物とそれに対する語り手の位置が挙げられる。一方で『春』は青年の群像を描くことを目的（その目的を完成できなかったとしても）とし、岸本（島崎藤村がモデル）に焦点を当てながらも、彼が登場しない場面も多く含まれており、また彼以外の人物の心境も語られている。例えば、青木（北村透谷がモデル）については、「旅から帰った岸本が唯其所に坐つて居るとは思はなかつた—彼は眼前に往時の自分を視るやうな気がした」とその心中が表され、菅（戸川秋骨がモデル）の場合は「物の奥に隠れた新しい意味を考へるやうに成つた」と、恋してしまった彼の心持が露わにされ、また他の登場人物の心理描写の場合においても同様である。このように、『春』における語り手は全知的かつ客観的な存在であるといえるのだ。他方で、『桜の実の熟する時』では、すべての出来事が主人公の岡幸吉（藤村がモデル）の視野を通して描かれており、回想される出来事として彼の青年時代に直接関わるものだけが選択され、語り手のノスタルジックな視線も幸吉のパーソナル・ヒストリーに収斂されている。

『春』においても、そして『桜の実の熟する時』においても、数多くの他作品が引用、または言及される。『春』の場合は、それらの引用・言及について、「投げやりな方法」¹¹であると批判され、語り手による意味づけの欠如が作品の一番の欠点であると指摘されてきた。確かに、例えば透谷の評論「人生に相渉るとは何の謂ぞ」が引用される後のコメントは「と言つたりしたのは明らかに彼の心中を暴露したものである」に止まり、また『チャイルド・ハロルド』の一節が引用された後には、「この歌を歌つて、青木は岸本と一緒に海の方へ行かうとした」としか書かれておらず、一見語り手の説明が不足しているように見えるが、『春』の場合は、この不足が引用の選択や配置という、作者の微妙な操作によって補われているのである（本論の第一章、「島崎藤村『春』における〈狂気〉のパラダイム—〈引用〉という叙述方法を視座に一」を参照。）

対して、『桜の実の熟する時』の場合は、各引用・言及に説明・解釈が添えられている。例えば次の言説を見てみよう。

初めて自分等の国へ紹介された露西亜の作物の翻訳に就いて語るも楽しかつた。日本の言葉で、どうして彼様な柔らかい、微細い言ひまはしが出来たらう、といふことも二人の青年を驚かした。

¹¹ 小仲信孝「青春幻想の終焉—島崎藤村『春』—」（「国文学解釈と鑑賞」平成三・四）。

ここでは、幸吉と西尾（戸川秋骨がモデル）の話に上がる『あひどき』について、二葉亭四迷の翻訳書が新しい文学に適した日本語の発見のために果たした役割が言及され、文学者志望の二人に与えた刺戟も描かれているのである。また、

「浅見先生には僕は神田の学校でアーヴィングをおそはつた。『スケッチ・ブック』なんて言つたつて本が無かつた。先生は自分で抜粋したものをわざわざ印刷させた。アーヴィングなぞ紹介したのは恐らく浅見先生だらうと思ふよ。」

とあるように、この場面において、浅見先生（木村熊二がモデル）は日本におけるアーヴィングの紹介者だったと推定され、その「若い明治の代」を生きた人たちの学問、とりわけ文学への熱心が強調される。

さらに、『春』において透谷の評論「厭世詩家と女性」が引用される際、その意味づけは直接に行われることはなかったのに対して、『桜の実の熟する時』においては、引用後に次のような言説が見られる。

これほど大胆に物を言つた青年がその日までにあらうか。すくなくも自分等の言はうとして、まだ言ひ得ないで居ることを、これほど大胆に言つた人があらうか。

このように、評論の冒頭が引用された後、幸吉のそれに対する感動が詳しく表されると同時に、青木の発想は皆が言おうとしているものが初めて言葉になったものとして評され、その歴史的な意義もほのめかされている。次の場面をも見てみよう。

もつともつと胸一ぱいに成るやうなものが欲しい。左様思つて見ると、堤を切つて溢れて行くやうな「チャイルド・ハロルド」の巡礼なぞの方に、幸吉は深く心を引かれるものを見つけた。青い麦の香りを嗅ぐやうなバアズンの接吻の歌も、自分の国の評判な俳優が見せて呉れる濡幕にも勝つて一層身に近い親しみを覚えさせた。『ビイナスとアドニス』の情熱を通して、『エルテル』の悲哀を通して、まだ知らなかつたやうな大きな世界のあることを想像し始めた。

『春』でもバイロンの詩が引用されるが、その後に「この歌を歌つて、青木は岸本と一

緒に海の方へ行かうとした」としか記されておらず、直截的な説明はなく、解釈が読者の文脈を読み解く力に委ねられている。しかしここでは、幸吉を魅了した西洋詩人バイロン、バーンズ、シェークスピア、ゲーテが「自分の国の評判な俳優が見せてくれる濡幕」と対比され、前者が「大きな世界」へと広がる可能性を孕んでいると評されている。そうすることによって、主人公の思想的な基盤が示されると同時に、明治二〇年代における江戸的なものと西洋的なもののぶつかり合いも暗示されているのである。

丁度あの雑誌の中に現れて居たものは、そのまま学校の方にも宛嵌めて見る事が出来た。斯うした意気込の強い、雑駁な学問の空気の中が、幸吉の胸に浮かんで来る麴町の学校だつた。すべては試みだ。そして、それがまた当時に於ける最も進んだ女の学問する場所の一つであつた。

この場面では、吉本さん（巖本善治がモデル）が主幹であった「女学雑誌」の活躍が評価され、その歴史的な意義も強調される。「当時に於ける最も進んだ」という表現から、この評価も〈回想〉の時点からなされていることが窺えよう。

幸吉は二十一といふ歳も二週間ばかりのうちに尽きやうとする頃であつた。麴町の学校でも第二学期を終わりにかけて居た。彼はある悲しい決心を掴んだ。「古人も多く旅に死せるあり」とその「奥の細道」の中にある文句を繰返した。

『桜の実の熟する時』においては、西洋文学や明治文学の試みとともに、芭蕉の『奥の細道』も引用されている。それは、明治二〇年代における芭蕉受容のあり様と関係しているといえよう。例えば、藤村は「馬上人世を懐ふ」（「文学界」二号、明治二六）において「流れ行く水も理想の姿になりとせば、西行芭蕉ダンテ、セクスピアの徒これまた風流の姿にあらずや」と、西洋・日本古典の偉人を同じ価値の基準を元に論じているのだ。

要するに、『桜の実の熟する時』では引用されるテキストや、言及される雑誌と人物について説明が添えられており、それらの文学テキストなどが主人公の精神的な成長との関係において語られると同時に、明治二〇年代という「当時」において果たす役割も強調されているのである。

続いて、『桜の実の熟する時』において描かれている、明治の「若い二十年代」の中に成長していく二十歳前後の青年について考察してみよう。

2.2 青年像

『桜の実の熟する時』においては、『春』とは違って、焦点は青年群像ではなく、主人公幸吉のパーソナル・ヒストリーに当てられると先に述べた。そこでまず、少年から青年になろうとしている幸吉についての言説に着目してみよう。

天は焰の海のやうに紅かつた。驚くべく広々とした其日まで知らずに居た世界がそんなところに閃いて居た。そして、その存在を語つて居た。寂しい夕方の道を友達と一緒に寄宿舎へ引返して行つた時、言ひあらはし難い歓喜が幸吉の胸に満ちて来た。

ここでは、夏期学校で「希臘道德より基督教道德に入るの変遷」という講演を聞いた帰りに、その感動を胸に浮かべながら夕暮れの景色に見入っている幸吉の姿が描かれている。文明史の講演によって得られた豊かな知識と自然の壮麗さが重なり、希望に溢れる「広々とした」世界を幸吉に示しているのである。

その一方で、彼の悩みが次のように語られている。

憂鬱—一切のものの色彩を変へて見せる憂鬱が早くも少年の身にやつて来たのは、幸吉の寝巻の汚れる頃からであつた（中略）制へがたく若々しい青春の潮は身体中を駆けめぐつた。

幸吉にとっての成長は、将来から吹いてくる「そよそよした楽しい風」、あるいは「遠い先の方」で自分達を「待受けている」「広々とした世の中」だけではなく、「憂鬱」のイメージにも結びつけられ、自分がコントロールできない自然のものとしての成長に対する彼の抗いも表されている。

青年時代に自然と身を襲う「憂鬱」だけでなく、幸吉の悩みの元になっているのは、将来への不安でもある。

幸吉に言はせると、自分達の前にはおほよそ二つの道がある。その一つはあらかじめ定められた手本があり、踏んで行けば可い先の人の足跡といふものがある。今一つにはそれが無い。なんでも独力で開拓しなければ成らない。彼が自分勝手に歩き出さう

として居るのは、その後の方の道だ。言ひがたい恐怖を感じるのも、それ故だ。

卒業後の幸吉の心境が表されているこの場面において、「恐怖」を乗り越えて「自分勝手な」道を歩き出し、「何でも独力で開拓しなければ成らない」という彼の決心が語られ、その行程は孤独で危ないものとして描かれている。また、

自分で自分の小さな生涯を開拓するために初めての仕事を宛行はれに訪ねて行く幸吉の身を取つては、涯しも無く広々とした世の中へ出て行かうとするその最初の日のやうでもあつた。

とあるように、小父さんの許を離れて、翻訳の仕事に取り掛かろうとする、自分で自分の道を「開拓」したいという幸吉の決心は繰り返し表されている。この開拓とは、新しいものへの執念や、知らない「広々とした」世界に向けた期待を意味すると考えられよう。

何時来るとも知れないやうな遠いやうな先の方にある春。(中略) 青木と幸吉の交際はその日から始まつた。(中略) それほど心の渴いて居た幸吉は、斯の新しい交りが展げて見せて呉れる世界の方へぐんぐん入つて行つた。

この場面において、「何時来るとも知れないやうな遠いやうな先の方にある春」に対して不安と期待を抱えながら「早い春を実現した」青木（北村透谷がモデル）に出会い、自分も「新しい交りが展げて見せて呉れる世界の方へ」と進んでいく幸吉の姿が表されている。そしてこのような長い過程を経て、「幸吉は眼前に望み見る若葉の世界をやがて自分の心の景色として眺めながら歩いて行くことも出来るやうな気がした」とあるように、教壇に上ることが出来、やっと自分の道を歩き出した幸吉は、自然界の春と同時に、「自分の心の景色」としての春をも迎えようとしているのである。

幸吉にとっての青木との出会いは、文学の世界への入り口であり、また恋愛への入り口でもあつた。彼が友達の著作（透谷の評論「厭世詩家と女性」）において説かれた「愛」に触発され、自分の生徒勝子に思いを寄せるようになる。しかしここで幸吉が発見する「愛」とは、理想的なものであり、また文学作品にあるようなものでしかないのだ。幸吉が「ずつと遠い昔に歌集や随筆を遺して行つた徳の高い僧侶の生涯などを考へ、誰でも一度は通過さねば成らないやうな女性に対する情熱をそれらの人達の若い時に結び着けて想

像」し、自分を悩ましている「愛」の形を古典にも見出している。そして、この悩みに決着をつけるための旅立ちも「古人も多く旅に死せるあり」という『奥の細道』の文句に裏づけられているのだ。

芭蕉からのこの引用によって、旅のモチーフは死のモチーフに結びつけられてもいるが、テキストの末尾では逆に旅＝新生というイメージの方が強い。同じ〈旅の始まり〉で終わる『春』だが、その末尾の雰囲気形成する「灰色の空」、「水煙」や「ザアと」降ってくる雨、さらに「映つたり消えたりし」ている外の風景は、岸本の閉鎖的かつ絶望的な心境を表している。他方で、「まだ自分が踏出したばかりだ」、「まだ若いさかりの彼の足は踏んで行く春の雪のために燃えた」という『桜の実の熟する時』の末尾は明らかに対照的である。要するに、主人公幸吉の憂鬱や悩み、また将来への不安と恐怖が描かれながらも、その向うには何か期待できるような「広々とした世界」があることが暗示され、彼はその世界への道に「踏出したばかり」であるとされているのだ。

以上のような幸吉の表象されるプロセスに加えてテキストには、幸吉の個人的な体験だけではなく、普遍的な青春の体験も浮かび上がっていくといえるのである。例えば、次の言説からそれが窺えよう。

彼は自分自身の遽かな成長を、急に高くなつた身長を、急に発達した手足を、自分の身に強く感ずるばかりでなく、恩人の家の方で、もしくは其周囲で、自分と同じやうに揃つて大きくなつて行く若い人達のあることを感じた。

皆無邪気な少年から漸く青年に移りつゝある時だ。何となくそよぐとした楽しい風がずっと将来の方から吹いて来るやうな気がする時だ。(中略)揃ひも揃つて皆急激に成長つて来た。春先の筍のやうな斯の勢いは自分の生きたいと思ふ方へ幸吉の心を競ひ立たせた。

これらの場面において、「成長」は幸吉の身だけに起きている変化ではなく、「自分等」、「皆」、「若い人達」が「揃ひも揃つて」経験するものとして語られている。また、「春先の筍のやうな斯の勢い」などのような表現によって、これは自然のものであることも強調されるのである。このように、幸吉の成長が「皆」の成長として拡大され、また『桜の実の熟する時』の「年若な読者」が共有できる一つの体験として提供されているのである。

要するに、幸吉の新しさの追求を促しているのは、翻訳を通した新しい日本語の発見や

西洋文学の紹介、また「女性の改善と発達」などという、当時の様々な「試み」である。また、開拓者の孤独と苦痛が描かれながらも、末尾においては「踏み出したばかりだ」という主人公の言葉によって、「待受けている」春、の確実に存在することが再確認される。さらに、作品中で若い幸吉たちと「若い明治の代」のイメージが重ね合わせられ、その将来への確実な進行が明治二〇年代の出来事を回想している語り手の存在によって保証されるといえよう。そこで次に『桜の実の熟する時』に見られる、『春』と異なる作風・主人公設定に影響を与えたと思われる一つの重要な要素として、発表媒体と発表当時の文壇状況を検討していこう。

3. 大正期における文学受容の変貌

3.1 大正期の投稿雑誌

『桜の実の熟する時』の発表媒体は博文館から出版されていた雑誌「文章世界」である。若者を相手に、文章の見本を提示し、文章訓練を行う傍ら、文壇ゴシップや文学知識を多く掲載するなど、投稿雑誌の特質と文芸雑誌の要素を両方持ち合わせた、一般青年向けの読み物である。このような「文章世界」の目的は、実用的な文章を一般青年に学ばせるということであったが、投稿欄を設けることによって青年たちに〈文学〉に参加することを促進しながら、文学・文学史・思想史等についての教養をも与えていたのである。「文章世界」の読者は一五歳から二〇歳までの若者であり、地方出身の農業従事者が多い。苦しい日常の中にあつた彼等にとっては、「文章世界」を通して接触できる〈文学〉は、ある種の救いでもあつたと、「読者通信」欄に寄せられる青年の手紙からは窺うことができる。

「文章世界」と同様の特質を持ち、同年齢の青年を相手にしていた雑誌として、新潮社から出版されていた「文章倶楽部」が挙げられる。これらの二誌においては、明治文学史を回顧する記事と、文学者の個人史に焦点を当てる記事といった二種類の言説が大正に入ってから現れ、大正六年前後に頻繁に載せられるようになっていた。また、このような記事は文芸雑誌や総合雑誌ではほとんど見られないことから、この傾向は投稿雑誌に特有なものであり、雑誌の一つの目的である「教養」や読者層の年齢と無関係ではないと考えられる。

一方で「文章世界」や「文章倶楽部」においては、明治の文学と文壇を回顧し系統的に

捉える記事が載せられることによって、明治の文学の再評価・価値づけが行われ、〈今〉の文壇とのつながりが示されていた。また他方で、文学者の文壇に上るまでの生活がその作品・作風に投影されているとする言説も多く見られる。文学者の青年時代を中心的に扱うこういった記事には、文学者と読者の距離の縮小や、立志して偉くなった文学者の神話化という二つの狙いがあったといえよう。つまり、「文章世界」と「文章倶楽部」両誌上の言説は、文学的・文学史的な知識を教養として与えながら、有名作者の文章の手本だけでなく、文学者の個人史を扱うことによって、それらの生活をも手本として若者に提示していたのだ。（両雑誌における記事題目と『桜の実の熟する時』に関する書誌情報は〈表〉を参照。）

そこで次章において、このような言説の中で〈藤村〉という記号がどのように位置づけられ、受容されていったのかを見ていきたい。

3.2 文芸投稿雑誌における藤村のイメージ

藤村は明治四三年から四四年まで「文章世界」の募集小説の選考に携わり、作品を評価したり、投稿者にアドバイスを与えたりする役割を果たしていた。後に田山花袋が「文章世界」の小説選評を退いた際、当誌の「読者論壇」では「差し当り氏の後として自分の望ましいのは藤村氏を措いて、他に見当たらない」（三樹耕平、大正六・二）という意見が出た。また、同じ「読者通信」において、藤村の執筆空白に対して「寂しく思った」ことや、「藤村氏の作品に接したのも嬉しいもの」（浅見夕煙、「文章世界」大正六・六）であったことが度々表され、藤村の帰国後の「目覚しい活躍」（「文章倶楽部」大正五・八）に対する「期待」も読者の感想として誌面に現れる。また、「文章倶楽部」の「前月文章史」（大正七・六）で『桜の実の熟する時』の書き方が「天下一品」とされ、久保田万太郎は「真似す可き文章」（「文章倶楽部」大正七・八）として藤村のそれを選択している。

さらに、巧みな文章と文学的な活躍だけではなく、作者の実生活までもが評価されている。「文章倶楽部」の「文壇立志編」（大正五・八）は藤村を扱っているが、その中に彼の犠牲と苦難の多い人生が語られ、「彼の生涯は、最もよき芸術家の生涯であつた」と結論づけられているのだ。また、「文章世界」の「読者論壇」（大正八・三）では、藤田朝男が藤村を「やさしい叔父さん」と呼び「私は叔父さんといつしよにいつも苦しみ、そして涙を流すのである」と言い、若い人たちの藤村への憧憬と、彼の小説において描かれている

苦痛への共感を表している。

つまり、この時期に文学・文章の指導者として、そして生活の手本としての藤村像が「文章世界」や「文章倶楽部」の記事によって作られ、青年読者によって受容され、また藤村の作品の読まれ方にも影響を及ぼしていたのである。そのため、同じ男女の群像を登場させ、同じ作者の青年時代を描いた『春』と『桜の実の熟する時』の読まれ方が異なり、その差異は以下のような要素によって形作られていたと考えられる。

まず、『春』は「東京朝日新聞」に発表され、モデル小説として様々なメディアにおいて報道されていた（例えば、明治四〇年八月号「新声」の「緩調急調」欄や「読売新聞」明治四一年十一月二九日号に掲載された生方敏郎「『春』を読む」などにおける言及が挙げられる）。『春』の発表以前から、藤村の短編「並木」をきっかけにいわゆる〈モデル問題〉が起こり、その結果、主人公に作者の面影を見ろという読書習慣が誕生したとされている。だがしかし、日比嘉高の指摘によると¹²、「モデル問題」が喧しく論議されたのは、主に文芸雑誌上なのである。（中略）大部分の新聞購読者にとって「モデル問題」は、文壇で起こっているらしい一事件にとどまった」とあるように、当時の一般読者と文壇人の間に横たわっていた距離はまだ遠かったといえるのだ。このように、発表当時『春』を受容した読者として、一方では文壇情況に詳しく、かつモデル小説であることを意識した上で、当て物をするように読んだ〈文学読者〉が存在し、他方では娯楽として連載小説を読んでいた一般の新聞購読者も存在したと考えられる¹³。これら後者の読者は、明治四〇年前後に形成されつつあった〈モデル小説〉という読書行為を獲得できておらず、登場人物に「文学界」同人を重ねることもできなかった。しかし、『桜の実の熟する時』の時代になると、このような読書行為が普及した結果、「文章世界」誌上で本作品を読んだ青年読者も幸吉を藤村と結びつけ、主人公の経験を作者自身が経験したのとして受容し、描かれている出来事・時代背景を〈事実〉として解釈していたと考えられる。

他方で、明治後期に文学者の死が新聞などに広く扱われることになり、「個人の死による文学史的な時代の分節といった発想が出現している」と中山照彦¹⁴は指摘している。当初はこの操作が死去した文学者に限られており、しかも文学史が作者の個人史とセットで

¹² 『〈自己表象〉の文学史』（翰林書房、平成一四）。

¹³ 新聞小説『春』の読者について、池上研司「新聞小説『春』の読者層」（『島崎藤村研究 第一〇号』昭和五七・五）と高橋昌子「作品と作者—『春』論二—」（『島崎藤村 遠いまなざし』和泉書院、平成六）に詳しい。

¹⁴ 「死の歴史＝物語—明治後期の“文学者”の死の報道—」（『文学』平成六、五卷三号）。

語られることもなかった。こういった傾向がやがて出現したのは、大正六年前後の新旧交代の際であったと指摘されている。山本芳明によると¹⁵、「新旧交代劇は同時代の人々に強烈な印象を与え、翌七年には近代文学の流れを回顧する様々な企画がメディアを賑わせた。(中略)大正六年には、以降の日本近代文学を長く支配していくことになる、作家の実人生と作品の関係、それに連動する作品の評価に関する新しいパラダイムとそれをよしとする感性が顕在化し、正当化されようとしていた」のである。

さらにまた、大正期の青年についての一つのキーワードは「教養」であり、彼らの文学への接し方を形作っていたのも、この「教養」に対する態度である。筒井清忠によると¹⁶、大正期において、「青年層の関心が「天下国家」から「個人」の問題へと移行」する過程と並行して、「大衆の中核的エートス」であった「修養」と、学歴エリート向けの「教養」が「人格の完成」に向けて次第に収斂していき、文学的・哲学的な思想が一般教養と見なされるようになったのである。大正期に、教養としての文学・思想へアクセスしたいという青年の数が増加したことを根拠づけるものとして、啓蒙的な特質をもった「文章世界」や「文書倶楽部」のような文芸投稿雑誌の人気やこの時期に次々と出版される文学全集・選集の需要の拡大が挙げられよう。

4. おわりに

「文章世界」と「文章倶楽部」という文芸投稿雑誌は、文章の手本だけではなく、生活の手本としての文学者についての言説や、文学史、文壇情報をも載せることを通して、教養を求めていた大正期の青年のニーズに応えようとしていた。また、読者の作者になりたいという欲望を掻き立てることで、読者一作者の共同体という幻想を作ろうとしていた。同時に、実生活と芸術の関連に焦点を当て、文学者として名を成している人の「人格」を賞賛しながら、その特殊性をも際立たせようとしていたのである。

このような時代を背景に書かれた『桜の実の熟する時』において、自然の営みに喩えられた〈成長〉の普遍性が表されると同時に、「開拓者」として文学の道に挑む幸吉の特質も強調され、また、彼の「個人史」である〈人間形成〉のプロセスが語られるとともに、「若い明治の代」の進行も語られていくのである。

「文章世界」誌上で『桜の実の熟する時』を読んでいたであろう青年読者は「若い明治

¹⁵ 『文学者は作られる』（ひつじ書房、平成十二）。

¹⁶ 『日本型「教養」の運命』（岩波書店、平成七）。

の代」を体験していない者であったと考えられる。これらの読者は普段から、〈文学史〉の一側面を説明・解釈し、教養要素として与えていた「二十五年前の文壇」と、一人の青年が文学者になるまでの経緯を示し、それに伴った人格陶冶の過程を手本として提示していた「文壇立志編」といった、文芸投稿雑誌上で頻出していた記事を読むことを通して、明治の文学史について知識を得、明治の大家をはじめ、様々な文学者に親しむことが出来た¹⁷。そのため、読者の需要に応える形で（また同時にこの需要を形作りながら）こういった記事を多く掲載していた「文章世界」において発表された『桜の実の熟する時』も、この流れの中に読まれ、以上のような記事の要素を持ち合わせたものとして受容されたと考えてよい。つまり、『春』以前の出来事に属している、主人公が文学者になるまでの苦しい青年時代というテーマの選択、あるいは『春』の「集まって談笑する」¹⁸青年たちの描写から幸吉の個人史への重点の移行、また文学史的な言説としての明治の「若い二十年代」についての説明・解釈の挿入という作品の内容と、「文章世界」という作品の発表媒介における他言説の結合が、発表当時の『桜の実の熟する時』の読まれ方を形成したといえるのだ。

¹⁷ 例えば、「文章倶楽部」の「青年文士録」に「自分の私淑する人物」という項目に対する投稿者の返答をまとめた編集者の報告によると、大正五年九月に藤村が六位、大正八年八月に五位、とかなり高い位置を占めている。同様に根強い人気を誇っていた大家としては、夏目漱石、田山花袋、国木田独歩などが挙げられる。

¹⁸ 『春』を書きつゝある島崎藤村氏（「新思潮」明治四〇・九）。

Bibliography

- 池上研司「新聞小説『春』の読者層」、「島崎藤村研究 第一〇号」、May、1981
- 伊東一夫「『桜の実の熟する時』論考」、東洋大学大学院、March、1976
- 小仲信孝「青春幻想の終焉—島崎藤村『春』—」、「国文学解釈と鑑賞」、April、1991
- 笹淵友一「『桜の実の熟する時』論（上・下）」、「学苑」November、1986& February、1987
- 島崎藤村「『桜の実の熟する時』の後に」、「定本版藤村文庫 第四巻、1937
- 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』、実業之日本社、1972
- 高橋昌子「作品と作者—『春』論二—」、「島崎藤村 遠いまなざし」、和泉書院、1994
- 「「事業」と「実業」の間—『春』から『桜の実の熟する時』へ—」、「島崎藤村研究 第二五号」September、1997
- 「『桜の実の熟する時』の読書—「生涯」の模倣から「文章」の模倣へ—」、「国文学解釈と鑑賞—島崎藤村 生誕百三十年特集」、October、2002
- 和田謹吾「島崎藤村」、「国文学解釈と鑑賞」、August、1971
- 滝藤満義「『桜の実の熟する時』—失われた時間を求めて—」、「島崎藤村』明
- 筒井清忠、『日本型「教養」の運命』、岩波書店、1995
- 中山照彦、「死の歴史=物語—明治後期の“文学者”の死の報道—」、「文学 五卷三号」、1994
- 日比嘉高『〈自己表象〉の文学史』、翰林書房、2002
- 山本芳明、『文学者は作られる』、ひつじ書房、2000
- 和田謹吾「島崎藤村」、「国文学解釈と鑑賞」、August、1971
- *** 「『春』を書きつゝある島崎藤村氏」、「新思潮」September、1907

| 文章世界 博文館 M39・3 ～ T9・11 | | 文章倶楽部 新潮社 T5・5 ～ S4・4 | |
|--|---|--|---|
| 明治文学回顧 | 生活と芸術 | 明治文学回顧 | 生活と芸術 |
| T元 学の概観」田山 花袋 | T2・3 「文章と其れ を書く人の生活」 西村渚山 | T2 「桜」発表 T2・1、2 初稿 (後に廃棄) 「桜 の実」一&二章 T2・4 「「桜の 実」の読者に」 | |
| T元 壇に於ける幾多 の光景」 | T2・4 「文学者の生 活」中村星湖 | | |
| T3・6、7、8 「売文二十年史」 (一)(二)(三) | T2・5 「新人の生活 と芸術」西村渚山 | | |
| 巖谷小波 | T2・9、10、11 「創 作前後の気分」中 村星湖、鈴木三重 | | |
| T4・2 「新声時 代の小歴史」高 須梅溪 | T2・9、10、11 「創 作前後の気分」中 村星湖、鈴木三重 | | |
| T4・4 「龍土会 追想録」蒲原有 明 | T3・3、4、5、6、 7 「上京当時の回 想」中村星湖、 森田草平、小川未 明、上司小剣、正 宗白鳥、北原白秋 | T3・5 『桜の実 の熟する時』と 改題、一章 T3・8 二章 T4・1 四章 T4・2 五章 T4・4 三章 | |
| T4・8 「新体詩 壇の回想」兒玉 花外 | T3・4 「生の営みと 詩作と」清浦青鳥 | | |
| T4・10 「パンの 会の思ひ出」長 田秀雄 | T4・9 「独身者の文 学」生方敏夫 | | |
| T5・4 「紅兒会 の頃」今村紫紅 | T5・3 「処女作の思 ひ出」小川未明、 鈴木三重吉、中村 星湖 | T6 T6・5 「稿を継 ぐ前に」 T6・11 六章 T6・12 七章 | |
| T5・5、6 「明 治二十五前後の 文壇(上・下)」 武田鸞塘 | T5・2、3、5、6 「文壇立志編」谷 崎潤一郎、長田幹 彦、上司小剣、武 者小路実篤 | | |
| T5・7 「无声会 の思ひ出」結城 素明 | T6・7 「私と創作」 芥川龍之介 | T7 T7・1 八章 T7・2 九章 T7・3 十章(上) T7・4 十章(下) T7・5 十一章 T7・6 十二章 | |
| T7 「文壇旧夢録」 (一)、(二)、 (三)潮青居 | T6・10 「文学者の一 生」武者小路実篤 T7・6 「創作をする 者の心地」前田晁 | T8 T8・1 春陽堂か ら刊行 | |
| | | | T5 T5・7 「明治 文壇側面史 (一)『蒲団』 物語」 T6 T6・9 「小説の はじめ「書生 気質」と「浮 雲」 T6・10 「硯友 社の人々」 T7 T7・1 「文壇三 十年物語」 T7・4 「三十 年前の文壇」 (口絵) T7・11 「文壇五 十年史」 T7・12 「新文芸 五十年史」 |
| | | | T5 T5・5、6、 7、8 「文壇 立志編」田山 花袋、徳田秋 声、小川未明、 島崎藤村 T5・11、12 「私 の投書家時 代」田山花袋、 長田幹彦 T5・12 「処女 作物語」長田 幹彦、正宗白 鳥、田村俊子 T6 T6・2 「私の 苦学時代」稲 毛詛風 T6・5 「五月 特別倍大文壇 立志号」 T6・6、7 「私 の十七の時」 T6・8、12 「私 の文壇に出る まで」 T7 T7・8、9、 10 「文壇諸家 二十歳前後」 |